



「METAR からの航空気象」

横田友宏・新井直樹・

中西善信 著

鳳文書林出版販売，2020年 2月

254頁，4,400円（税込）

ISBN 978-4-89279-452-0

本書は METAR (定時飛行場実況気象通報式)・TAF (運航用飛行場予報気象通報式)，一般気象，及び気象情報の航空機運航への利用と対応，の3つの主要テーマを軸に解説が進む書である。一冊の中に，学科教育が始まったばかりの入門段階にあるパイロット訓練生向けの記述と，既に経験を積み知識も豊富な機長昇格訓練段階にあるパイロットに向けた記述とが併存する，特色ある構成の書である。

本書では見出し項目に番号が振られていないので，ここでは大きな活字による見出しを「章」と見做し，以下「各章」順に内容を簡単に紹介する。また「各章」見出し後の括弧内に「各章」の総頁数を示す。

序に続く第1章「METAR」(193頁)では METAR が解説されている。途中で「地球全体のエネルギー収支」等一般気象概論が解説されている。また飛行障害となる現象に対する関係者の対応方法等が，METAR の観測項目それぞれの後に解説されている。

第2章「TAF」(9頁)では TAF の解説法と利用上の注意点等が示されている。

第3章「フライトに関する諸規則」(5頁)，第4章「VFR ナビゲーション」(3頁)では METAR の適用や判断方法を中心に解説されている。第5章「衛星画像」(3頁)では METAR 通報項目外である気象衛星に敷衍し，簡単な解説が行われ衛星写真が紹介されている。

第6章は「最低気象条件」(27頁)である。ここでは離着陸に関わる関係諸規則に定めるルールがパイロット向けに解説されている。METAR で入手する視程や雲高等の運航への適用について学ぶ事が出来る。

以上，本書全体を概観した。次に紙数的にも全体(254頁)の大半(193頁)を占める第1章を少し掘り下げてみる。第1章は27の解説から構成されている。その内訳は①METAR 観測項目の解説(11項目，48頁)，②気団・前線やシステム等の解説(6項目，39頁)，③

「○○への対処と留意点」の解説(10項目，106頁)となっている。

特に③は第1章の半分以上を占めており，本書中でも最も力が入っていると見られる部分である。空港内関係機関の対処方法等にも触れており，業務の繋がりも理解する事が出来る。

本書は著者のパイロット学生時代の経験も踏まえ，まず学生が METAR を解説し実際に使用出来るように，との趣旨で書かれたとしてある。一方，上記③「○○への対処と留意点」は実用機での注意点を含め解説されている。入門段階を遙かに超える水準の解説も多いが，行間から伝わって来るのは後輩に自身の経験を全て伝えたい，と言う著者の思いである。本書執筆の最大の動機もここにあると見られる。③にはまた運航関係者の参考になると見られる記述も多く含まれている。

気になった点に触れるとすれば，RVR (滑走路視距離) 観測機器に関する下記記述である。

「RVR は日本では滑走路面上2.5m の高さで観測がされています (WMO では5m としています)」

(評者注：WMO=世界気象機関)

上記記述は「日本では国際基準の半分の高さで観測している」との誤解を読者に与えてしまう可能性がある。引用された WMO の言う「5m」はパイロットの眼の位置の滑走路からの高さを示す数字であり，機器による RVR 観測の高さを示すものではない。国際基準に言及するのであれば，根拠や背景も含めその全体像を正確に示し，現行の方式や業務への正しい理解が損なわれない様な配慮も望まれる。以上，些細な事項だが，入門者への影響の大きさの観点から敢えてコメントしたい。

本書は英語に例えれば，アルファベットをこれから学習する人と，同時通訳試験受験中の人と，それぞれに向けた解説が同時進行的に進められている書である。パイロット以外の読者のもとより，平均的なパイロット入門者にとっては理解の難しい内容も含まれている書である。一方，本書には現場の気象関連写真も豊富に掲載されており，パイロット以外の関係者の興味をも引く記述が各所に見られる。空港全体の運用にまで対象を広げた著者の視点に敬意を表したい。最後に，本書がパイロットの気象情報利用の“How to”書として後輩を中心に広く読まれ，本書を通じ先輩パイロットや関係者の気象判断と経験が余す処なく伝えられて行く事を期待し，本稿のまとめとしたい。

(NPO 法人火山防災推進機構 小野寺三朗)